

宮崎県歴史の道調査報告書

諸 塚 間 道

1979

宮崎県教育委員会

目 次

1. 諸塚間道の特徴…………… 1
2. 諸塚間道の歴史…………… 1
3. 諸塚間道…………… 2
4. 街道沿いの文化財…………… 5
5. 写 真…………… 1

序

宮崎県は、東は日向灘・北・西・南は山岳で県を境する地勢のため、かつては交通不便の地とされてきましたが、戦後の急速な発展にともない、本県もあらゆる面で近代化の波を受けてきました。

そのため古来から人や物の交流の舞台となった道も年々姿を変え、沿道の交通関係遺跡は姿を消そうとしております。今のうちに街道調査を行い、街道の歴史的背景、果たした役割、現状等を明らかにしようと「歴史の道調査」を、昭和52年度に県北5街道、昭和53年度に県南4街道の調査を実施し、引き続き本年も薩摩・肥後街道と諸塚間道の調査を実施いたしました。

本報告書は、街道の特色・歴史・様子・及び街道沿いの文化財や遺跡の解説、及び街道地図からなっています。

短期間になされた調査ですので、不備な点もあろうかと思いますが、本県の旧街道保存、あるいは交通史の研究のための基礎資料として御活用いただければと思っております。

最後に、お忙がしいなか、お骨折りいただいた調査員の方々、並びに調査員に御協力くださいました地元の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和55年3月

宮崎県教育委員会

教育長 四本 茂

例 言

1. 街 路 名

江戸時代にあつては、道路の規模により街道と往還を使い分けていたようであるが、現在往還は用いないのですべて街道とした。

また、街道は、厳密にいえばいくつかの往還に細区分される。

しかし、すべてをあげる必要もないので、距離も長く中心となるものを代表させた。

2. 街路の概要説明

街道の詳細な記述は、街道沿いの交通関係遺跡の解説に譲り、ここでは街道の持つ歴史的背景、街道の果たした役割、街道の現状等を概括的に記した。

3. 街道沿いの交通関係遺跡解説

(1) 個々の解説の前半に、遺跡及び遺跡周辺の状況、遺跡と遺跡間の状況の過去から現在にわたって述べ、後半に遺跡そのものの解説を付した。

従って個々の解説をとおして読めば、起点から終点迄街路の全容が把握できる。

(2) 街道沿いの主な集落には、戸数、集落間の距離又は起点からの距離を記したが日向地誌によった。地誌は明治8年の調査をもとにしている。

(3) 集落間の距離、起点からの距離で、何里何町と記してあるのは日向地誌によるもので、他は地図から割出した距離であるので正確は期しがたい。一応の目安としていただきたい。

(4) 交通関係遺跡の配列はほぼ道順に沿っているが、間道あり脇道ありで複雑をきわめるので、街道図を参照していただきたい。

1 諸塚間道の特徴

諸塚間道として今回調査したルートは2本ある。1つは椎葉街道と高千穂街道を結ぶもので、椎葉村の松尾を起点とし、諸塚村の塚原・家代・九左衛門峠・清水峠、北方町の桑水流を経て終点川水流に至る間道(約3.8km)である。この間道を九左衛門峠越え間道とすれば、もう1つは、諸塚村の要所塚原を起点とし、猿越・九郎山・星の久保・高千穂町の七ツ山越・秋元・椎屋谷を經由して終点高千穂町三田井に至り、高千穂街道に接続する間道(約2.9.5km)である。本調査では、この道を九郎山越え間道と称することにした。

諸塚村の中心地である塚原を通過する、又は、起点とするこの2つの間道の大半は、山の尾根、即ち分水点の稜線を伝う山頂の道で、遠く見通しのきく道である。

現在、山嶺の稜線沿いの道には、登り口又は下り口即ち山麓にしか集落はないが、大古にはこの線沿いの山間部に集落が営まれたようで、諸塚村史によると、この稜線沿いに縄文遺跡が数多く分布するとある。いってみれば、この両間道は大古に形成されたと言ってよい道である。

又、平部山崎南著の日向地誌によれば、道巾5~4尺とあるので、1m内外の道でわずかに人馬を通す道であったと考えられる。

九左衛門峠から中小原間の尾根道は、廃道となつて幾久しいのに、長年人馬が踏みしいた道であるため、今だに旧道の跡をとどめている。

九左衛門峠越え間道は、人々が椎葉に出る、又は川水流に出て延岡に、あるいは日之影に出るための道、そして、椎葉・諸塚で産する椎茸・茶・木炭、かじ皮等の山産物を五ヶ瀬川水運の発着地川水流まで輸送するための道であった。即ち、往路は山産物、復路は海産物、日用品を積んだ荷駄

の列が行きかった。

九郎山越えの間道も、高千穂、更に肥後の馬見原に出るための道、そして山産物・海産物交流の道であった。

現在、旧道が完全な形で残っているのは、九左衛門峠から高畑に至る黒根道の約1.0kmであるが、新しい幹線道路の建設計画があり、早晚姿を消すことであろう。

2 諸塚間道の歴史

諸塚間道の特徴で述べたように、九左衛門峠越えの間道(松尾-塚原-川水流)も、九郎山越えの間道(塚原-高千穂)も、大半は標高800m以上の奔流を行く道で、山嶺の稜線に沿った山地に縄文時代の遺物が出土するので、これら尾根道は古代からあったものと思われる。

したがって、戦国時代になると天正19年(1591)高千穂を治める三田井氏と、延岡を治める高橋氏との間に争いが起り、高千穂と延岡のほぼ中間にある家代(諸塚村)城主甲斐宗説の存在が重要性を帯びてくる。甲斐宗説は三田井親武の家臣であったが、高橋元種に内通し、これがために三田井氏は滅びる。

九左衛門峠越えの間道も、九郎山越えの間道もある時は使者が、ある時は軍勢が行き交ったことであろう。

また、これより14年前の天正5年には、日向一門を治めた伊東氏が、薩摩の島津氏に破れ、豊後の大友宗麟を頼って、佐土原-米良-神門-諸塚-高千穂-豊後領内へと逃避行を重ねるが、諸塚の塚原から高千穂に出るのに、一部、九郎山越えの間道を通っている。

なお、九郎山越え間道は、塚原から九郎山、星の久保、諸塚山山腹と標高900m以上の高所を

辿って行くが、諸塚山の南東山腹に諸塚神社がある。諸塚山は彦山参験道と関係のある霊峰で、行者がこもった。一般庶民も諸塚村はもとより、五ヶ瀬、高千穂方面からも詣ったようである。

諸塚神社境内には、天保4年奉納の石燈籠一対が残る。

江戸時代に入り、藩の奨励によって林産業が盛んになると、椎葉・諸塚・高千穂方面からの山産物が馬によって、五ヶ瀬川舟運の発着地川水流まで運ばれた。

諸塚には、次のような駄賃つけ歌が残っている。

1. おれどま十三から
駄賃つけならたよ ドー
たづな手にして日を送る ホーイ ホーイ
2. おれども駄賃つけ
だちんさよあねばよ
親子五人ぐち つけてとる
3. おれども馬方 行き来は遠いよ
朝日の出を待つ入りを待つ
4. おども病む娘を 夜道におせて
鈴を鳴らせて急ぎ足

明治に入ると宮崎県内各地は西南の役の戦火に見舞われる。両備道とも延岡から可愛岳を越え高千穂に出、諸塚・米良・須木・小林を經由して鹿兒島へ敗退する西郷軍が通過しており、九左衛門峠越え間道のうち、椎葉村寄り松の平乗落の藤本家に西郷隆盛が一泊している。

現在、これら間道のうち川嶺を行く尾根道の利用者は全くなく、旧道の面影をよくとどめている。

3 諸塚間道

(1) 松尾から松の平へ

下松尾から耳川の北岸にわたり、岩屋戸・野地・竹の八重・佐士の谷を通る。この間約3km

であり、岩屋戸から野地へは尾根を越え佐士の谷へ道は下るが、ここからだんだんと登りになり、山の中腹の小が倉から村境を越えて方川に出る。方川は村境を越えて諸塚村にはいると最初の人家のある所であるが、昔2軒あったという人家も今は1軒である。

ここまでの道は、人1人がやっと通れる道で、耳川が断崖下はるかに見える。現在は九州電力塚原発電所古園ダムが湖水をなし、その湖岸を国道327号線が岩肌の上をはしっている。

方川から松の平間は約3kmで、道はだいたいの平坦道となって松の平にはいる。方川から松野に行く途中、方川谷を渡る。この谷のすぐそばに、市房様の墓とよばれるものがあつたと言われる。伝説では鎌倉時代に椎葉の方から落ちてきた武将が休んでいる時、矢でいられ死亡したといわれ戦前までは参る者もいたということであるが、現在は旧道が杉山となり墓の位置もわからない。方川・松の平間は旧道に沿って車道が建設されている。

松の平に、七ツ山方面から合鴨(ごうしぎ)八重を通過して耳川に下り、西郷村松の越から六方が辻を越えて神門へ出る道がある。明治10年の西南の役では、可愛岳を説した西郷軍の本隊が通り、松の平の藤本家に1泊して神門へ向つたと言われている。米良の菊池氏の先祖も七ツ山方面から松の平に出て一時滞在し、米良に向つたと言われており、島津家久も天正年間(1573〜)の頃この方面を通つたと伝えられている。

(2) 松の平から平塚へ

松の平から榎木谷までは山腹を行く道で、ほぼ中間的に馬頭観音^⑧がある。

耳川本流と七ツ山川が合流したところが吐ノ川であり、ここから耳川下りの高懸船が日に2回ほど山の産物を積んで耳々津(美々津)へ出

ていた。塚原から上流まで船があがれるように明治17年川の工事をしていて遺囑にあった時の舟が吐ノ川バス停前にある。昔の船着き場には、現在九州電力塚原発電所ができています。

榎木谷から塚原の集落まではずっと登り坂である。現在の車道より高い所を通り塚原神社前を出て集落より上を通っている。

塚原は、諸塚村内では平坦地であり、日当りもよく古代から人が住み家が一番多い所である。明治22年に家代村と七ツ山村が統合し諸塚村になってから、昭和初期頃までは役場や局、小学校がここに設けられ諸塚村の中心地となった。現在の国道725号線が日向から桂葉に開設されてから、村の中心は新塚原の耳川沿いに移動した。

天正5年(1577)の島津・伊東の戦いにおいて、伊東氏は米良からこの塚原の鎌正宅に宿し、黒葛原・立岩に泊り、諸塚越えをして高千穂の方へ回っている。

天正6年(1578)の大夫・島津の戦いで、大夫軍は敗走し豊後に帰る途中、塚原に建っていた薬師堂を感き払ったといわれており、その堂跡は今も残っている。

桂葉から延岡方面に行くには、塚原から家代を通り、高千穂へ向うには塚原から釜之前を通る。

(3) 塚原から家代へ

塚原から約1km下り 耳川支流の柳原川を渡ると家代となり、ここには現在諸塚中学校が塚原から移転し、人家も1軒ある。昭和25～26年までは塙がなく、明治10年の西南の役で官軍の兵士が増水で渡れず苦勞した記録がある。

現在は村道が旧道を拡巾し大きく代行して車道となって登っている。家代本村は明治の初期まで家代村の中心で、庄屋・戸長役場が置かれ人家も多く、明治の頃までは小学校もここにあ

った。戦国時代の頃は高千穂三田井家の頃に甲斐宗説がここに城をかまっていた。

家代金鷲寺は熊本県矢部の城主甲斐秋政が加藤清正に攻められ、家代峠まで逃れてきたところを高橋元種(15)の指示で待ちふせられ、主従皆戦死し、宗説が秋政を弔うために建立されたといわれている。寺には宗説が使用した県指定有形文化財の「笈」と、宗説がいつも押んでいたといわれる將軍地蔵が安置されている。

金鷲寺の上が家代神社である。この神社には県指定有形文化財の「漢式鏡」等11面の鏡が保存されている。

集落内には、怪塚や六地蔵などがある。八幡あたりが本村の中心で標高約400mであり、諸塚村内の集落の中心地はほとんどが山の中腹で、標高約400～500mの所である。

村から村への平坦道は、山稜の入りこみが深く道程が遠い。

(4) 家代から九左衛門峠へ

家代から崖際の道を北東に約1km進むと池ノ窪(16)に出る。旧道は7m幅の林道に変わりつつある。池ノ窪公園北側に道際(17)がたっている。道標から約1.5kmで国見峠に達するが、旧道の道際に慶長2年(1597)に立てられた三田井家の家臣、甲斐兵庫守秋政の墓がある。この墓から南東約50mの地に秋政に従って戦死した者たちを葬った塚(18)がある。

丸野の秋政墓地から数百メートルで黒葛原から登ってきた道と一緒になる。ここが柳の越であり、ここから約1km進むと鬼が浄土(19)で、浅敷から登ってきた道と一緒になる。山の尾根道であるが平坦道で、杉山の中に旧道がところどころ残っている。鬼でも住みそうな、又、鬼でも出そうな深い森山であったことからこの名がついたと言われている。

ここから約1.5kmほどで、川の口の追分に着

く、ここで七ツ山方面から立岩・峠を通過して延岡へ向う道と一譜になり、少し下りとなりながら深山にはいる。ここが九左衛門峠で、標高1101mの高所であり、諸塚村・北郷村・日之影町の1町2村を界している。峠路には、現在も人馬の踏みしだ道跡が樹林の中を幾筋も残っている。この峠は、椎葉街道と高千穂街道を結ぶ諸塚間道のほぼ中間点で、交通の要所であるので石造物が幾つも残っている。

現在は九左衛門峠の手前まで林業作業道が通り、旧道を拡幅又は旧道と交って走っている。五ヶ瀬・延岡間の大幹線林道、大分県目から那木に達する大規模林道もここを通る予定である。

(5) 九左衛門峠から連日の峰へ

九左衛門峠から約2.5km尾根道を進むと、中小屋に着く。この間は旧道がそのまま残っている。昔は、椎葉・諸塚からは山産物を延岡へ、延岡からは海産物・日用品を選んだその中継点として賑わった所であるが、現在は人家が三世帯ほどあるだけで、北郷村と日之影町を結ぶ車道が上ってきている。

中小屋から石峠まで約2kmは、標高800m～900mの稜線の北側、日之影町よりの道を進む。南側は北郷村で、石峠で道が分かれ、峠ぞいを進むと、大山・荒平を通り城に、谷ぞいを下ると、木浦・猿渡を通り城に出て、ここから五ヶ瀬川を舟で下る道もあるが、船数も少なく、駄賃付の場合はほとんどまっすぐ連日の峠に向けて川水城に出る方が多かった。

ここから、連日の峰までは勾配のゆるやかな「長道」と呼ばれたただら道を進む。

(6) 連日の峰から川水へ

連日の峰は、二子山・二子塚ともいわれ、標高868mで、連日命御降臨の地ともいわれている。

連日の峰から約1kmで清水峠に着く。峠の山頂付近に清水が湧き、観音様がまつられている。ここも九左衛門峠と同様、諸塚間道の要所で、北郷村黒木・北方町猿渡に下る道がある。旅人や馬方がここでのどをうるおし一息ついた所である。

清水峠から稜線の道を約2.5km進むと高畑に着く。中小屋と川水流との間では人家はここしかない。旅人などが休んだ所でもあり、現在民家が3軒ほどある。

高畑からは下り坂道となる。終点川水まで約1kmの桑水流集落を見おろす所に馬頭観音がまつられている。昔は堂があり、旅人や馬方はこの堂で休んだようである。

ここから坂道を下り、船に乗る者は桑水流に出て、五ヶ瀬川を船で下った。又、駄賃付の者は、桑水流の勘定屋に荷をあずけ来た道を引き返していった。勘定屋は、諸塚・延岡・双方からの荷を預かる中継業と旅館業を合わせて行った。

ここが、九左衛門峠越えの諸塚間道の終点である。

(7) 塚原から星の久保

塚原は高千穂街道に接続する九郎山越え間道の起点である。塚原から1kmで釜ヶ淵の集落に着く。ここから山腹を開いた道を北西に約1.5km進むと猿越である。ここに、明治に立てられた道標が、塚原・平田組・七ツ山に通じる三又路がある。ここから九郎山までの旧道は諸塚の山地の中央稜線を走る尾根道である。

九郎山西斜面の脊梁の道をおりると桐の家の辻に出る。ここには道標はなく杉の大樹が2本そびえている。ここから約1kmで星の久保に着く。ここは塚原から諸塚山までの峠づたいで一番高い所で、山頂に天保2年(1831)に立てられた山の神の碑がある。七ツ山・八重の

平・立岩方面から高千穂に向う道が合流する。

(6) 星の久保から秋元へ

星の久保から、正面に諸塚山・東に日諸峠・西に飯干峠を見ながら峠の頂を北に進むと、約2kmで仲崎から登ってきた道と一筋になる。ここから約4km進むと諸塚山登山口となる。ここから諸塚山頂に麓を登ると、標高1,200mのところ、諸塚神社跡がある。ここに、木の島唐と天保4年(1853)建立の石燈籠がある。現在は山頂に登る人も少ないが、江戸時代までは、七ツ山郷内の者が祭りをおこない参拝者もあつたようである。又、昔は修験道者のこもる山であつたとも言われている。

七ツ山庄屋あとには、元禄時代にここに神社を建てた榎木写しが残っている。

七ツ山越といわれる区間はかなり長い、七ツ山越を越すと高千穂町の秋元である。

秋元にはいる手前約1kmの所を西に約1km行くと水の口神社がある。ここは、諸塚山太子大明神をまつり、神代の太鼓といわれる古い太鼓が伝わっている。

諸塚・高千穂を結ぶこの間道は釜の前から秋元まで集落は全くないといってよい。したがって、秋元に昭和の初めまで、諸塚と高千穂の郵便物の引継所があつた。

(7) 秋元から三田井へ

現在、秋元から高千穂町三田井へはバス道となり旧道は残っていない。

秋元の集落の入口の麓地に道標がたっている。ここから約1.5km進むと黒仁田の集落である。黒仁田集落の南に柘の滝鍾乳洞がある。

黒仁田から約1kmで鶴の平であるが、ここに庚申塔がある。ここから約1kmで石原に着く。村の中央に庚申塔がある。三田井寄りの道の上に、旧向山村の庄屋跡や小学校跡がある。

石原から約2.5kmで椎屋谷にはいる。集落の

入口に庚申塔があり、そばに観音様がまつられている。

椎屋谷は三田井氏の家臣屋敷があつた所といわれ、山手にはいると浄土真宗弘誓山教願寺がある。集落から約700m山手にはいると、三田井氏の菩提寺であつた義雲寺跡がある。中山の集落の入口には庚申塔があり、すぐ西側が自然の要害を利用した中川城跡があるが、現在は田圃となっている。

中山の庚申塔から約400~500m先の森の中に、中山城主高千穂太郎と、三田井家の最後の城主三田井武親の墓がある。ここからバス道に出ると400~500mで御塩井であり、ここに観光客で賑う五ヶ瀬川峡谷(高千穂峡)があり、諸塚と高千穂を結ぶ九郎山越え間道の終点である。

4 街道沿いの文化財

椎葉村

① 松尾の集落

松尾は、旧松尾村の中心であり、明治の初期には195戸の集落で、人口は1000人余りであつた。

② 竹の八重

竹の八重は、旧松尾村に属し、明治初期には7戸ぐらゐの小さな集落であつた。

③ 村境

椎葉村と諸塚村の村境である。村境といっても、藩境とは異なるので、境界を示すものは何も残っていない。

諸塚村

④ 方川の民家

椎葉村から諸塚村に入ってきた最初の人

家のある所で、昔は2軒あったということであるが、現在は1軒だけである。

⑥ 西郷隆盛寓居跡

方川から松の平までは、屋根伝いの道で、途中松野に人家があるだけである。

松の平には、高千穂町三田井から、南郷村鬼神野へ敗退する西郷隆盛が一泊したという藤本家がある。

⑦ 馬頭観音

松の平から榎木谷までは山腹を行く道であるが、ほぼ中間点に天保14年(1843)建立の馬頭観音像がある。

⑧ 遺囑碑

榎木谷の耳川本流と七ツ山川が合流するところが吐の川である。ここは真川(塚原・美々津間)を上り下りする船の発着場であった。

遺囑碑は、耳川開削工事の事故者を悼んだもので、明治17年の建立であり、吐ノ川バス停の前に立っている。

⑨ 塚原神社 ㊦

塚原は、昔から交通の要所であり、東は延岡、西は椎葉、北は高千穂へと三方に通ずる。

塚原神社は、もと平田大明神と称した。寛永14年(1637)延岡藩主有馬氏が島原天草の乱鎮定の帰途、塚原を通り刀三振を奉納している。

⑩ 塚原遺跡

塚原の中心部から約500m北方に諸塚小学校がある。

小学校建設時に縄文・彌生時代の遺物が多数出土した。

⑪ 上方の純塚

家代上方にある室町時代の経塚ともいわれ、この近くから中国朝鮮の古鏡が出土している。村人の話では、京都の公卿の墓ともいい、

又、家代神社をここから礼拝した祭場所ではないともいわれる。別名を神主山とも呼ばれている。

⑫ 家代神社

塚原から進路を東にとり、柳原川を渡って山坂道を登ると中腹に家代神社がある。

祭神は、伊弉册命、事解男命、速玉男命の三神で、古くは熊野大権現と称した。

なお、この神社には、20面ほどの神鏡があり、内11面が県指定有形文化財でその中に漢式鏡が1面ある。

⑬ 六地藏壇 ㊧

家代神社前の道をさらに登ると、金鶏寺前に出るが、手前川際斜面に地藏菩薩が6体安置されている。

⑭ 金鶏寺

王鳳山金鶏寺は、延岡台雲寺の末派で、家代でも一番高い所に建ち、ここからの眺望はすばらしい。

この寺は、高千穂の三田井氏の家臣、甲斐宗説の菩提寺として建立され、甲斐一族の遺品を多く残す。なかでも仏具を運ぶ笈は県指定有形文化財に指定されている。

⑮ 家代城跡 ㊨

家代は旧家代村の中心で戦国時代には、高千穂の三田井氏の家臣甲斐宗説の居城があった。

⑯ 家代の峠道

家代上方から池ノ窪に向う旧道は、7m幅の林道に変わりつつある。

⑰ 池ノ窪の茅場

家代の本村から崖祭の道を北東に約1kmで池ノ窪に出る。

ここには、村人共有の茅場があったが、今は村人のいこいの場として公園化されている。

⑱ 池ノ窪の道標 ㊩

池ノ窪公園北側の山腹に立っている道標であ

る。右へおへらい (小弘)

左へわけじょう (分城)

と彫られている。

⑩ 国見峠

この間道の終点川水流へは、左分城への道をとる。道標から約1.5kmで国見峠に達するが、旧道の道際に、慶長2年(1597)に立てられた三田井家の家臣甲斐兵庫守秋政(肥後の国矢部城主)の墓がある。

甲斐兵庫守秋政は、文祿2年(1593)肥後の加藤氏に攻められ、主従17人で薩摩をさして逃がれる途中、延岡高橋氏の指図で待ちぶせていた土民200人の手にかかってこの峠でうち死にしたという。

⑪ 甲斐秋政従者の墓

甲斐秋政の墓から南東約50mの地に、秋政に従って戦死した者たちを葬った塚があり墓標が立つ。墓標は高さ2m程の自然石で碑文が彫られていたが、現在は半分から下を残す。

⑫ 鬼が浄土の道

現在池ノ窪から、ここ鬼が浄土の北方約2.5kmの九左衛門峠の間は、林道が開設され、旧道はこの林道に沿ってところどころに残る。通る人もなく荒れた道跡だけが確認できる。

⑬ 川の口の道分

鬼が浄土の北約1.5kmの地点は、三つの尾根道が合するところに道標が立つ。この道標は川水流から来る者のために立てられたもので、

表に、奉道案内 右へ川ノ口七ツ山道

左へ家代村道

裏に、明治8年丁亥年 川ノ口村

建主 川野吉右衛門

とある。

⑭ 九左衛門峠

九左衛門峠は、標高1101mの高所で、諸塚村・北郷村・日之影町の1町2村を界する。

この峠は、椎葉街道と高千穂街道を結ぶ諸塚間道のほぼ中間点で往来する者はここで一息ついた。

峠路はよほど人馬が踏みしだとみえて、廃道となってから久しいのに道路をよく残す。

⑮ 九左衛門峠の石碑

九左衛門峠は、交通の要所に当る地点であるので、石造物が幾つも残っている。

峠名は、昔九左衛門という者がこの峠で100匹の狼に襲われ殺されたという伝説からついたといわれる。

北郷村

⑯ 中小屋

九左衛門峠から中小屋までは、峠から峠への尾根道であるので、途中に人家はない。椎葉・諸塚からは山産物を延岡へ、逆に延岡からは海産物・日用品を運んだが、その中継点が中小屋で、当時は非常に賑わった。

⑰ 長道

中小屋から速日の峠までは、石峠など3つの峠を登り下りする。道は山腹、又は山腹を行くだらだら道であるため「長道」と呼ばれた。

北方町

⑱ 速日の峠

旧道左手北側に迫るのが、二子塚といわれる速日の峠で標高868mである。

⑲ 清水観音

清水峠も九左衛門峠と同様、諸塚間道の要所で北郷村黒木、北方町猿蓑及び打頼に下る道がある。

峠の山頂近くに清水が湧いており、そばの観音堂には、宝暦14年(1764)建立の観音様がまつられている。旅人や馬方は、こ

こでのどをうるおし疲れをいやした。

② 高畑の集落 ㊦

高畑からは下り坂の道となる。高畑には民家が3軒ほどあり、茅葺きの家が見られる。

旧道がほぼ当時の形で残っているのは、九左衛門峠からこの高畑までの間である。

③ 桑水流の馬頭観音

終点川水流まで1km余り、桑水流の集落を見おろす所に馬頭観音がまつられている。

像は、享和3年の建立で、「供養、喜多方川水流村、六月吉日」と刻されている。背は堂があり、旅人や馬方はこの堂で休んだようである。

④ 勘定屋 ㊦

桑水流を過ぎると九左衛門峠越えの間道の終点、川水流で高千穂街道と合流する。桑水流には、勘定屋と呼ばれる花畑家があって、諸塚・延岡双方からの荷を預かる中継業と旅館業を合わせて行った。

花畑家から五ヶ瀬川までは、約1000mでその間は米倉・カジ倉などの倉が並んだ。昔は舟荷・馬荷の積みかえて賑わったようである。

諸塚村

① 釜の前の集落

釜の前は、旧家代村に属し、明治の初期には12戸の集落があった。

② 猿越の道標

釜の前から山腹を開いた道を北西に進むと猿越である。道標は、塚原・平田組・七ツ山に通じる三叉路の杉の下にあり、明治に入ってからの建立である。

③ 九郎山林道

猿渡から九郎山までの旧道は、諸塚の山地の中央緩急を走る尾根道で、このうち約1.8kmが

九郎山林道として整備された。

④ 春梁の道 ㊦

猿越(791m)、九郎山(936m)、星の久保(934m)を結ぶ春梁の旧道に沿い、現在高圧線が架せられている。

⑤ 星の久保

星の久保は、標高934mの高所で山上は開けているが耕地はなく、疎林が広がる。現在、旧道と林道が併行している。

⑥ 山の神 ㊦

星の久保の山頂の灌木林の中に、天保2年(1831)に建立された大山祇神の石祠があり、鉄製の手が牽納されている。

⑦ 仲崎の尾根道

九郎山と七ツ山越えのはぼ中間点で、仲崎の集落に下る道が西側にある。現在、林道が旧道を横断している。

⑧ 諸塚神社跡

仲崎から眺望はよいが、変化のない尾根道を北に進むこと約4kmで諸塚山(1542m)の南東山腹に出る。

旧道、左手標高1200mの高所に諸塚神社跡はあり、イザナギ、イザナミの2神をまつっていた。諸塚神社の別名を太伯さんともいうが当所に来た具の太伯をまつたからといわれる。

又、諸塚山は、昔は修験道者がこもる山とされ、英彦山等と関係があったようである。

⑨ 諸塚神社の鳥居と石燈籠 ㊦

諸塚神社跡に木の鳥居と天保4年(1833)建立の石燈籠一対がある。なお、ここから東約400~500mに東の神前宮跡、西約400~500mに西の神前宮跡がある。

⑩ 諸塚山登山口

諸塚山は、山岳信仰の霊峰で、昔は修験道者がこもった。ここから七ツ山越(高千穂町)までの道のりは、約2km、標高1000m以上の

尾根道である。

④ セツ山越

セツ山越は、諸塚村と高千穂町との町村境でこのセツ山越を越すと高千穂町の秋元である。

高千穂町

④ セツ山越三叉路

セツ山越といわれる区間はかなり長い。ここから右手東方向に下ると符成であるが、天正5年(1577)島津氏との争いに破れ、米良・椎葉・諸塚・高千穂と豊後の国への逃避行を行った伊藤一族の一行が符成に向っている。

④ 水の口神社

旧道から西に約1kmに水の口の集落があり、ここに水の口神社がある。この神社は、諸塚山の山岳信仰と関係があり、諸塚山太子大明神をまつている。又、神代の太鼓といわれる古い太鼓が伝わっている。

④ 郵便物引継所跡 ㊦

諸塚～高千穂を結ぶこの間道は、起点塚原の次の集落釜の前からここ秋元まで集落は全くないといってよい。それで当地に昭和の初めまで諸塚と高千穂の郵便物の引継所が置かれていた。

④ 道標 ㊦

秋元の集落の入り口の墓地に立っている道標で文化15年(1818)の建立である。

なお、この道標は石の前半分上部に如来像を浮彫りにし、下部に右三ヶ所、左村道と刻しており高千穂方面から来る者のために建てられたものである。

④ 柘の滝鑑乳洞

秋元から約1.5km川の中腹を縫う山道を東下すると黒仁田の集落で、鑑乳洞は集落の南約400m川を隔てた山腹に開口し、鑑乳石石筈、石枝が見事である。

④ 鶴の平の庚申塔

鶴の平は黒仁田と石原の間にある集落で、旧道の道脇に池の石造物と共に庚申塔がある。

④ 石原の庚申塔

塚の平から石原・椎屋谷を經由して、高千穂までの旧道は、五ヶ瀬川に沿って北上する道でバス道として拡幅された道である。

庚申塔は、石原の集落の中道路脇に立つ。

④ 向山庄屋跡

旧向山村は、明治の初め162戸の村で石原に庄屋が置かれた。庄屋跡は今は森となっている。

④ 教願寺 ㊦

椎屋谷の集落は、三田井氏の家臣屋敷があった所といわれる。教願寺は、旧道西側山腹に建つ浄土真宗の寺で寛文11年(1671)に弘誓山教願寺の山号、寺号が許可になっている。石段を登ると重層の山門があり、寺の歴史の古さを示している。

④ 義雲寺跡

椎屋谷の集落から約700m、旧道左手山上に義雲寺跡がある。

義雲寺は、高千穂地方を治めた三田井氏の菩提寺であった。

④ 義雲寺墓地 ㊦

三田井家の菩提寺義雲寺跡にあるが、田圃横の荒地に宝印塔や五輪塔が単独で、或いは寄せられて立っている。古いものでは、大永8年(1528)のものがある。

④ 中山の庚申塔

中山の集落の入口に立っている庚申塔で天保2年(1831)の建立である。

④ 中山城跡 ㊦

中山城は、中世頃高千穂地方を治めた高千穂太郎の拠った地で、前は五ヶ瀬川の峡谷、後は

山を控えた自然の要害であった。

三田井氏は、天正19年(1591)延岡城主高橋元種によって滅ぼされている。

㊦ 高千穂太郎の墓

中山の庚申塔から約400～500m先の森の中に、初代中山城主高千穂太郎と最後の城主三田井武親の墓がある。

㊧ 五ヶ瀬川峡谷(国指定名勝天然記念物)

五ヶ瀬川峡谷を渡ると諸塚間道の終点高千穂町三田井で高千穂街道と接続する。

五ヶ瀬川峡谷(高千穂峡)は、柱状節理を有する阿蘇溶岩からなる峡谷で約2Kmが国指定になっている。



④ 方川の民家
椎葉から諸塚に入ってきての最初の人家。



⑤ 塚原神社
もと平田大明神と称した。



⑥ 六地藏
金鳩寺前を通る旧道に並んでいる。



⑦ 家代城跡
家代は旧家代村の中心であった。



⑧ 池ノ窪の道標
右ハおへらい
左ハわけじょうと彫られている。



㉑ 甲斐秋政従者の墓
自然石でつくられているが下半分しか残っていない。
残っていない。



㉒ 川の口の追分
川水流から来る者のため建てられている。



㉓ 九左衛門峠
人馬のふみしだ旧道の跡をよくのこしている。



㉔ 九左衛門峠の石碑
九左衛門峠は交通の要所であった。



㉕ 中小屋
荷物の中継点として当時は賑わった。



② 高畑の集落
昔の名ごりを残す茅葺き屋根が見える。



③ 勘定屋
勘定屋として眠った花畑屋



④ 脊梁の道
旧道に沿って高尾線が架せられた。



⑤ 山の神
大山祇神の石碑と鉄の牙



⑥ 諸塚神社の鳥居と石燈籠
木の鳥居と石燈籠が残る
諸塚神社跡



㊦ 郵便物引継所跡
秋元の集落に郵便物引継所が置かれていた。



㊧ 道標
秋元集落の入口に立っている。



㊨ 教願寺
旧道西側にあり重層の山門がある。



㊩ 義雲寺墓地
三田井家の菩提寺義雲寺跡にある。



㊪ 中山城跡
現在は田圃となってしまった。

ま と め

本県では、昭和52年度に国の補助を受け、豊後・高千穂・杵築等5街道、昭和53年度に、米良・紙肥・鶴戸・志布志の4街道、そして、昭和54年度には、肥後・薩摩の2街道に諸家間道の調査を実施した。これで一応県内の主要街道の調査は終了したわけである。

歴史の道調査は、九州では本県が最初である。当時、芭蕉が辿った奥の細道や熊野権現参詣道、それに中仙道のような著名街道の調査はなされていた。

しかし、県内の主要街道の全てを調査し、街道の歴史的背景、街道の果たした役割、それに街道沿いの交通関係史跡等を明らかにする調査はなく、このような調査に取り組んだのは本県が初めてであった。

調査初年度は、国が伝統的建造物群選定に先だって調査を実施したように、歴史の道の指定、又は選定に先だっての事前調査というふうに行っていたが、文化庁の考えは、このような局所的な考えではなく、全国を全て調査し、南は鹿児島から北は北海道まで、全国自然遊歩道のように、全国歴史の道を設定するための基礎調査であり、非常にスケールの大きい調査であった。

このように、全国を一巡するような歴史の道が整備されるのはまだまだ先のことであろうが、調査を実施してきた本県にあっては、この調査を機に街道沿いの史跡に標柱や説明板をたてたり、歴史の道歩こう会が催されたり、各市町村において街道保存、又は活用に取り組みをみせるようになったことは、大変喜ばしいことである。

県としても、今後、貴重な文化財として歴史の道の保存、整備等に努めていかねばならないと考

える。

主要街道の調査は一応なされたわけであるが、間道や支道の調査が残されている。したがって、これらの調査は、今後も国の補助を受けて継続するか、県独自で調査を続けていくかする必要があらう。

調査の組織

- | | |
|---------|----------------|
| 1. 調査主体 | 宮崎県教育委員会 |
| 2. 事務局 | 宮崎県教育委員会 |
| | 教育長 四本 茂 |
| | 教育次長 国府 重則 |
| | # 坂口 鉄夫 |
| | 文化課長 日高 三好 |
| | 課長補佐 串間 実 |
| | 庶務係長 田中 君彦 |
| | 主任主事 王原 敦美 |
| | 文化財係長 山下 正明 |
| | 主任主事 立元 久夫 |
| | # 小森 達郎 (事業担当) |
| | # 今村 正人 |
| | # 岩永 哲夫 |

3. 報告書監修

石川恒太郎 (県文化財保護審議会委員)

4. 調査員

街道名	氏名	役職
薩摩街道	久枝 敏	県文化財保護指導委員
	阿万敬一	清武町文化財保存調査員
	児玉三郎	県文化財保護指導委員
	田上未雄	庄内小学校教諭
肥後街道	真方良穂	県文化財保護指導委員
	井上政造	#
	園田 隆	加久藤小学校尾八重野分校教諭
	加藤宣夫	飯野小学校高野分校教諭
諸家間道	甲斐重光	諸塚村職員
	深水 洋	諸塚中学校教諭

宮崎県「歴史の道」調査報告書

昭和55年3月31日

編集 宮崎県教育庁文化課

発行 宮崎県教育委員会

宮崎市橋通東1丁目9番10号

印刷所 西匂軽印刷

